紛脚の笛は尾列鳴海の
うてしや絵千代金にはりしの
[illegible]の所まで物なりとる
末代し修復なり

序

いるみ清らかなるや蛙の歌ふるう
おろかなれども花もひいまゝや
うまいやぢとなれいあし屋乃言葉。
よやしくるも唯あふぐばりや。其の
明をらい氷を動かさるゝ。朝にハ
鶯のほかりに梅のりとゝに鳴キ。夕にハ

門田のおきなよ家よむ蛙の聲。是
川の山鳥の聲もいとしほるゝ
鶴ぬ。うさいかぬ事ふまゝ積かて。徒に
かくやくるゝ者の夏古代にしば。
虚ゝくふ所にて入道ぞや

無暦稿

寛政酉年夏六月
和言之文

參河西吉田の国の領しのゝる。山城西
戸井郡。小名水村に。其の長せとせの生
まるゝ。万年といふ人(ヲホニ)氏(タカラ)なり。寛政元ど
めつ年に齢いこそ八十にいまれ二元
文二とせ　将軍家治公　行の代
元とりしなるとき。代老(ヲイト)な生髪をする。

あるは今年　御屋形に　同五
まゐなとにかゝせ給ひ、そのおかなかい齢
り七十よはまり、子らのあなはへる
申ぶ、たらひてふ見いりし五十よはまり、一萬
挍しきがりよきがりあひて、常子
そのめでたかりしとかり

小千谷

岩清水の記

無一暦誌

清水寺音羽の滝の水をば、常盤堅磐
願ふのみなゐに水にはみあふまゐらせける。
てふ事なりしやうなきくはつきぬ
世のならひの教へまちさらひて、此水とめて
ゑとなりぬ。風雅の友らは其付とゝめて、
は南のにするゝやうるの岩清水いはて
さよなくて下をも濁らぬ程となく象
とくかゞみの流れのうるほいゐて

とりまるをのこ。漱ゑの小河の水い。如
らふ山もまゐらせり。朧の清水鳥谷の
水をゐほやうに流き。走り井の水まこ
ゐけし。六玉河の水を風流のいきほせ。
宮治河の流を茶の湯清と合ゑ。家良
の水へ晒らせ如ゐ合(カナ)ひぬ。いざやこの
小手谷の岩清水を。音羽龍波此水を。
いけきかおとりまさらん。縮の都ゐあや

どりなし。多ぞりの鞍をおとしつく事も。
こととは水まもとづゐるゆへとや。いかし
めそかしろ水まてやありけん。滿ゐ岐麻
の經營ゐ雅く如新鋼いらかゐなるぞ。
萬世そうにおみなの業も多く。これ
るをかくきばかふのうのにおそれていせ
雪のあまれいとゐなるこのいましめらもなら
ん。

そととしの入て小手谷に鳥氏に贈る

ほのぐし明るの沖の所寒雪とよまれしは
人は此苦の下。だ霊前は明るの沖の
かれば面白るべしとされども明るの沖の
像はほのぐの白像なり。よまれしは人を
此苦の下の和分ゆりて悲しさにあるべきれ
見るさなれ人丸の霊像に。明る像柿本
がこして云あり。りつもも明るがこ柿本
がこの画像を画所に云ふ人まれなり
まこ無とし分思ふのしの字はやもてめの
文字ふしそのあとぞおもふの所分なり

風雅羽團 卅 無暦稿

水さびて月もやどらぬ濁り江に家何んと世
なくなり
なりけりし。是は西行山家集にはるかの家
古池や蛙とびこむ水の音と文字句せらる
あり。こゝろふ古池の文字を西にいろくし
邪解となすせるこゝろを。ふくしかりけり。
武夫山徳實純は日野大納言資枝の商門
雅分は撰志芝山御山家集の和分を所
て。此はしかくしまれや。文家の集の中に
向うるり花は咲けども所詮の多新をまる

移ずかなりしき。是ハ小野小町の宮なりけれど[illegible]
此宮の仏を。ほうろうり夕詠なきかを魂を[illegible]
かくらくらしおしのひき。[illegible]
清れくの中の三ケの大るのなれば。[illegible]
まれなりけり。芭蕉没後に一代の句集を
[illegible]。解やるつまなし。此ゆへにおしい
[illegible]の文句ハ。[illegible]一代の句集
[illegible]。又いとゝ[illegible]
[illegible]。[illegible]のいいなせ[illegible]
[illegible]。花鳥井雅章[illegible]宣ひけるとなり。
秋海薫一四瓜の[illegible]。菊の[illegible]

小ハ十日ゆきゝ佛道。此文句ゆへに面白きなり
なりとぞ。おのくめ[illegible]給ふぞや。又
富士の根を三月三日四日ゆ那。おなじく芭蕉
の文句なり。富士の高山領を祖代の深雪
かゝやきてとし。杜風をまて暗ふてこれ
交ぜれ柳様にもし特を。旅人のいきふ[illegible]
文画に[illegible]。富士の嵐をつゝるゝ。武蔵
の曲とおてより。相模伊豆駿河を以文三河所
におよぶ。日殺七日にあまれ[illegible]。[illegible]も七日の
日殺ぬ。言四日と御あひそう文句せられ[illegible]。
いとゝ[illegible]風流ゆるべし。[illegible]の[illegible]富士[illegible]

芙蓉とは唱ふるぐや。古詩に

朝ニ出テ芙蓉トツ　夕ニ宿ス芙蓉トツ

宿ニ既ニ三宿　未ダ出ニ芙蓉トツ

そせ物の文字句ニ似よくかなへりこれと文

は作ふことゞきまゝや。又雲野一体禅師

の分に

風は息虚元氏に日は服

海山かけそのこゝ鄭

そせ物は此こゝと且そのこゝにより其なひまれや。

辞世に

蚊屋おろ巴山河菓に眠るこ

此辞世かのくまゝめ申ちとしこゝるや。彼言ゆに

して言外の寄きあり。せまくに牛とどろき

股震ふ。殊にまてぐれそのさ古人にそとづき

まゝゆへに。かくうづ爲うきこゝ海のさ海

となし。分まがりまゝ多ふとき。又雪蓬

義仲寺の芭蕉の雅廟を拜まるに。

木曲風しけしろ何そやのそとなしいる段

句に碑面に隔住てり。桜ごとるよう今の

あそサの文字句は芭蕉の辞世の詮なし。是は

其の物の文字句なるべし。又芭蕉雪蓬

義仲寺に葉られて後に。塚の中にて文字句

発句せられしゝに雷鳴しく。芭蕉は雅段
何りしの方にてさみだれの比に出まずまかり。
禅者は殊座ところ山居に本眠るなり
そふおしも多ばいおらず。志ると芭蕉
居といひて神の名月を定め。またまた
うしろあとのことなすとゝくる也芭蕉庵
とるくみ多り。ましてや芭蕉塚取の建
立あれども。芭蕉の発句と其地に一
句合祢なし。参州鳳来寺に芭蕉塚
何り。其発句と其地と詠まさぐれて

相人(カナフ)なり。こからしや岩間にかゝれ松川ふ
といふ発句なり。歩行ならば杖つき坂を
落馬かな 芭蕉塚はいとはぬなりし。惟然の
発句なし 杖つき坂は定なりとふつゝるの
俳諧に新古ぶへよ對するを何らぶれども。
うたは三十一文字に詞をもとむるなり。又
なおよもとつくるかありてよみおきし
俳諧は俗語平話にして言葉くいとも宜。
實の意はよくするとも発句のさるいひをと
つきとなむしゆるもとるまし。和分の錯ひ出は

いとゆるやかにのびたり。俳諧の前さは鏡なふ
はまるなり。是は云せるの字なに仏詞を云い
つくせるゆへよ。自然と其風骨あらん。をもち
のことなとよ。漢俳といふ俳諧の家道ありて。
神代の片歌は今の世の俳諧文体なことにて。
俳諧片歌といふをはじめたり。其多万葉
のかなをつかひよみをれし。歌ぶ人もありまま。
いつかあとなくなり。漢俳のうちある俳諧
名歌集のもとへは片歌まづらに強しぬ。
又其れのうちかとよ。上総東金の産に多碎
といふ

家道あり。三ヶ家東海は大路の駅に鳴立
はとらふ北名ありけるを。かの多碎れにはい。
三夕の中にある。西ひのよまれる鳴立
はそこれなんめりと。分西ひ法師の本像と
家に安置して。西ひ多位の行脚の様そ
これなるとらひて。五人にはまれ木の法元の
もしきをはいはりの什物となり。鳴立は
秋のタヅれの西ひの真筆の鏡冊は早なり
なとどしいひて。いづれのくのとしのくなる筆やう。
えとも三人ともの此書なりし。一ちかいろくの
寝ぬをとりてしらへ。詩歌連俳を論ぶで

させ。人の情の一紙半稿に茶冬の下と略に
ぼらせ。往来の旅客をおまつて感じしぬ。
風雅の永如就。舞る〳〵と羽国とりう。
うへてぬ鶯の清かえれ。二とせこそせばり。
立せ居る人もありけるに。えも来仏るがひて。
ひがめるこしらへてすなりければ。唐は雨えり
早くぐりぬ。又蝶麿呂の皇子よさせのみ
行ふ坂の関は。山しなかふはあらば。むくは死る
帰るはせるに。日本国中皆悉くおふ坂の
関なりけるとぞ。うも此分は生死の悔悟を

よきせ給ふとうや。誠に古今集の中のうの
秀逸は此所しかなりとうや。ある人又邪解
していふは。世子鳴立といふ所はなし。死
ギ
未立てるほとしいふ事なり。死本とは分卒
部婆のうのをいへり。又山家集の中にいへ
詞しかよ。このへ詞でるほぬでよよめるし
ほるなり。このへ詞でるは茶ゑくひくを
いふなり。信之死本立法のうのなりとぬく
よはしかよさしせるへもあり。さるあらば。
仏あらん輩は。鳴立法の秋のうれのうえに
さしさんとおほしめさば。山家集の中に

古畑の祖のうづきまゝ居るゝとしの友呼ふ声
のまとどきうづれ。此家をおしうつりし吟し
まさんなりけり。凡る三尾三本三夕の
和家なりとし。俳諧ふあるぶ人のきゝ由ほしく
おぼさんなれどふ用の至りし。誰ひ是
俳諧の源氏なりとし。かしこきふ道を云
ひぬまじ。まづしくしてふきとつきてまゝ
うらん。あるやごとなきは公卿の何づまへ
くぐり給ふときよ。かの名碎のこしらへられ
大後の畸立法ふるゝ家あり

淋しさは穐なりしもとも知まり
畸立法のむかしなつかしき
かくしまひて部へもどらせて。此家と
なしらるよ。法卿いらへなふしておはるとや。
其後鳶丸朴山公いまぐ大納言の所信さ
とき。おなじくあつまへくぐり給ふとき
大後の四本立法へ立ようや給ひ

宴とのし畸立法と諫めとさば
よふ心なきへしいはまん

かくよみあひしを郡へ賜らせあひけるに。
其時信郷まさにこれを悦の眉とあらわしあひ
けるとかや。世にまたくらぶひくるる多く。
陸奥に壺のいしぶみをかりとて。相傳百代の
つゐでに立ちぬまれ人おほし。たゞるに大内
入御紀録にて。奥州仙臺に壺の碑あり。
これ壺の碑にはらぶ。是は多賀の碑面
なり。碑面に。常陸の國界をたるす
何百里。蝦蛦の國界をたるす何百里
とあり。まさしくの壺のいしぶみといふは。

桓武天皇東夷征回討のときに降来しなる。
東夷の誓言紙石に彫付事て是を津軽
のち中に埋む。是を壺のいしぶみといふ

定家郷

いしぶみは津軽のとちにはりときく
えらり世の中をおそひえなれぬ

西行多信

陸奥にはおくゆかしくうかれいるて
清ほのいしぶみとうとのたまや

陸奥の杉崎へよみ駒らせのふ公卿の和歌
いあまるなれども。杉崎ふして行脚の和歌
俳諧の文字句稀なり。流石のさせ知えて
うしふそいいるまふ悩えけるか。杉崎の風流を。
多賀の雨や西施か祝むのもとゝ為く
まれられと杉しゆいめるがや。そのこゝろ
俳諧にはうぶ友人見とをもとして杉崎
に文字句なれば本意なれなりといひて。やゝ
そもれば多賀のそのがこりやあひ為り。

中く杉崎の勝家をさせ文の文字句に吐れ
あさりぐさや。えし杉崎の文字句せしあぶ
きうゆほし。藝列の似雲といふうゆ人
杉崎ふまりうす
杉崎や崎より先きにしゆへとす
崎より先きに清くしゆく
まより雄じゆまうてりうす
仏あるかへまうへ白ぢや仏なまゝ
うまもおしゆの春の夕暮
それら新の一所といふ行脚似雲に對て

雪ちらちら降りかゝる。

王子　おゝ寒い。

かく碑面を照らす月光の下に、

一字いつくしき比丘尼の書写を営

まんとなす。比丘尼は、

おゝ寒いこと。

のゝしりつゝ、

王子　おゝ寒い。

かく碑面を照らす月光の下に、

一字いつくしき比丘尼の書写を営

まんとなす。比丘尼は、

おゝ寒いこと。

のゝしりつゝ、

王子　おゝ寒い。

かく碑面を照らす月光の下に、

一字いつくしき比丘尼の書写を営

まんとなす。比丘尼は、

おゝ寒いこと。

のゝしりつゝ、

王子　おゝ寒い。

かく碑面を照らす月光の下に、

一字いつくしき比丘尼の書写を営

まんとなす。比丘尼は、

おゝ寒いこと。

のゝしりつゝ、

王子　おゝ寒い。

かく碑面を照らす月光の下に、

一字いつくしき比丘尼の書写を営

まんとなす。比丘尼は、

おゝ寒いこと。

のゝしりつゝ、

王子　おゝ寒い。

かく碑面を照らす月光の下に、

一字いつくしき比丘尼の書写を営

まんとなす。比丘尼は、

おゝ寒いこと。

のゝしりつゝ、

王子　おゝ寒い。

かく碑面を照らす月光の下に、

一字いつくしき比丘尼の書写を営

まんとなす。比丘尼は、

おゝ寒いこと。

のゝしりつゝ、

王子　おゝ寒い。

かく碑面を照らす月光の下に、

一字いつくしき比丘尼の書写を営

まんとなす。比丘尼は、

おゝ寒いこと。

のゝしりつゝ、

王子　おゝ寒い。

かく碑面を照らす月光の下に、

一字いつくしき比丘尼の書写を営

まんとなす。比丘尼は、

おゝ寒いこと。

のゝしりつゝ、

王子　おゝ寒い。

かく碑面を照らす月光の下に、

一字いつくしき比丘尼の書写を営

まんとなす。比丘尼は、

おゝ寒いこと。

のゝしりつゝ、

王子　おゝ寒い。

かく碑面を照らす月光の下に、

一字いつくしき比丘尼の書写を営

まんとなす。比丘尼は、

おゝ寒いこと。

のゝしりつゝ、

王子　おゝ寒い。

かく碑面を照らす月光の下に、

一字いつくしき比丘尼の書写を営

まんとなす。比丘尼は、

おゝ寒いこと。

のゝしりつゝ、

王子　おゝ寒い。

かく碑面を照らす月光の下に、

一字いつくしき比丘尼の書写を営

まんとなす。比丘尼は、

おゝ寒いこと。

のゝしりつゝ、

王子　おゝ寒い。

かく碑面を照らす月光の下に、

一字いつくしき比丘尼の書写を営

まんとなす。比丘尼は、

おゝ寒いこと。

のゝしりつゝ、

王子　おゝ寒い。

かく碑面を照らす月光の下に、

一字いつくしき比丘尼の書写を営

まんとなす。比丘尼は、

おゝ寒いこと。

のゝしりつゝ、

王子　おゝ寒い。

かく碑面を照らす月光の下に、

一字いつくしき比丘尼の書写を営

まんとなす。比丘尼は、

おゝ寒いこと。

のゝしりつゝ、

王子　おゝ寒い。

かく碑面を照らす月光の下に、

一字いつくしき比丘尼の書写を営

まんとなす。比丘尼は、

おゝ寒いこと。

のゝしりつゝ、

うの面かけ此ぬるゝ名をつき

雜

思ひしらしと思ひしらしとしひあれ
おとしいへとかをいさらめや　無二千

籠

夜の中とかこひこゝ面てみよのや
よしの秋をとふへうちまき
もしてから秋のこゝ風をけしきな
花をかゝ雨とこゝ名かられぬる　仝

宮人政元二百の秋いじめて小子谷
のさしくまりいしさむきあ
ひとりこ珠のこゝれとふ鶴を
おのつからさぐりまの

思ひ出し夜なくさむきひとり
こゝれかりかしきなほのこゝ珠の
こゝなら、松間の吉人の
みなりとふるなりつちはの里　仝

まれ、しくの松原松間へ着て
小子谷かしなりとふるゝ雪　仝

中川屋のうせらまたるは
まちされい菊い芳咲く縣うんよ
つちにゆまさんしらおとひかけさや

左京乃領臣

おうなく思ひいさしれよけちめ
ちまいやしきくらしかりまる

寛政二丙のほまのりじめよ
あ雲陽より小ふ谷へまり
あれよしあくまきれへの
神を用ひしとさりけるを

ちくは河の月の漸と今いや後ろ
永日のやうとしられうめぬる

無一番

少谷勝房のことより
信吉の神奉納の和歌
乃歌を申まりけるとき

題　河の月

秋そこ芝乃ほ月ほて河水ほ
漕ひあとる和ふる月ほ月
さしらぐ秋の代のやき山川の
漸そかくれしも月いとこ紅り

仝

仝

鄙浦の月

くらさまさりけともたちてあ神を
浦をの月ふいくよかくしく

寄煙意　尚有

あ得さしは維か思ひのむ和ふて
仏のくけのくゆ[illegible]のりは

全

月所之雪

ふからしの森の梢ふてさしは
[illegible]のあとのはしくみえる

全

天明八年戊申正月廿日京師火災

えのなまくは[illegible]春の風
[illegible]の郎[illegible]ちりしのよは

澄月

[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

芝香

高尹

秋為

敷といふ所の車にのりとえて
今うぶこそひの家と出るなり　一室

柳井氏のそうせひの家を出る之
とよのこそこゝろ所なりて後
花ふ日さしなりしこゝらひて
信てるよりそふる

小車のうしと思ふ事なら侍り
まゝもせひの家にはしに　芝居

詩歌よおこひの家とおよへ
かゝおくきせがてるゝ侍も　慈延

詩の事なるも家にふり時き
極めもれしやとのうひを　高清

さうきこの時信せとも名雲の
みてのさくらひとりまゝ　公夏

贈　小子谷　長井和清子文　兵庫

芭蕉下に許さあり雅人いまさ江州
彦根公の家臣なりしかい法法ゐ
にてやまあんいはらの子細ありの御
服給りけり　前ハ三芳野人元の武士子
立帰るべき俺波のよ故色なり後ハ

身に成り帳に成る風乃芭蕉に属り
志しかしくきゝ俳諧の旨を究む
志し雅人ハ軍長子兵衛の庭にとり
六ツの印可と許りたるなり　代表の翁も
許さと呼ひ家も名とせり其法奈熟
家乃臣子大石何りしの嘱を悦大変原
宮許さ外伝連ゝる劍術の指意を

小田島 三條のぬしより出題

寄 けものに恋 山里紀

月新に心ゆるの新佐波の立ちたも
きりはいさきりよき

月新に立紀を流れ猿よりも
之門ときてぬるはもひなりけり

何ゆへにかたひ入るさの山婦かな
高ゆ新きもしたき猿の眉ひ法

寛政政いぬのとし乃ゆ中出高に
みさしりせしに柳尾又の笠
まもるにいさたれるの三月さる
かの花にさりぬ川のとつ急さ
むしに大鳥のさとたりいとあ
之門かもしるまりとしのるま

かとりぞ日数行ふ中に

詠　大湯四季之和歌

春　　無鷹山人

深山鳥は春に見ハ夢ふ行なし河

霞にあるゝ温泉の明石の

夏

高りわふ夏の花ふ湯の山ゆき

なるとしもなきも石の深しさ

秋

夏神ふ行こゝみて此ゝ娘しさい

ゝ春月大湯の嶺の月数

冬

年のくれ[illegible]ぬるゝ雪をさそふ河よ
ト温泉の煙[illegible]上[illegible]ゝ[illegible]

奉納　醫王瑠璃光殿
　　俳諧四季の三吟　　[illegible]

春

お肌貴ふと[illegible]と葉の湯の句

夏

[illegible]ぬ[illegible]手拭の[illegible]ほ[illegible]

秋

[illegible]の[illegible]ゝまの[illegible]の[illegible]

冬

夢さめて[illegible]ほ[illegible]湯の[illegible]

[illegible]

駒ヶ山嶽

詠　四季の倭歌　三唐山人

春

けり春の日縁もしらや白雲の
為れい現れ　春駒の山嶽

夏

鞭とうてい当ことも現雲の
駒のみ為けなくて夕立

秋

鈴虫乃音もたゆやう小雲虫の
ゆきがも
もいさしあれ　駒ヶ山嶽川

冬

くれ見まほ雪に期らしく成にけり
いさむこころたゞ駒乃みたけ成

寶政三亥乃とし孟春小お鴻に高

詠　寄香泉　無鷹山人

君の代の春ハ久しきあしにこそ

くむともつきぬちよの泉は

詠　朝鶯

何さゆふの友としなるゝ笑作乃
くゝ鶯ハわらゝるにくひ要笑

小おしゆのくゝ要し一頃のぬしの
ことゝへ賜ふし給ん

ちよの萬よも行きやしなふ言の葉の
打ち出る事しかに繋るべし 惠

詠　若菜和歌

春代萬行むとも行きぬけ暮るの
若菜我君に行ひ帯まつらん
思ひ入るかな暮て深雪きえ

誰かゝめみ行むもあふの若菜と

題　春雪

ひとしきは春の紀なからさへ見
訪見のこゝろ領ふ山まゝ如雪

題　山霞

山くはしきの春成しらゆ紀り
かまのこゝや惠の夕ゆんとも

以下
６丁
白紙

年玉扇之辭　城満麿

蒼蠅と悩ぞ。蚊の声のかほびまつきを追拂しと。
ぶく秋ぐれみとしれぬ。物数なしゐるれ
海風きるよいかぐらぐ。ゐまでこそをこのく
炬の蚊の巣ゐくよはらい退るて。山庭
そしてあたり。雲取の雲をえめ雲の
何しゐるを凌くよ。後ちふ年も当て。
色りなとるまゐる。雑事隙焼んと。
深みけるに亦ふまゐる網とくしとられ物と
乃せるゐ。福太子の飯酒のかん。七夕ん
田楽少年ぐらい。いたまもくゐれが

王代の間にあそぶなかいゝ雲水の墨りなき。
飲中の元人とりこ交りなかしはも
吾迎こゝ辞の恨りいとゝいくりと
ちろりかんとなる色和儒佛は

馬廉
小竭（ハヅく）
嚏（ハナヒル）
狹間（ハザマ）
這入（ハイリ）

聞書

廉をはして馬といふ人ありはきハ
かもおもはしとおもふなりけり　拾遺に
出山の紅葉の下のそはの家
まつしくにかゝる帰る意しも　萬葉
おそひかん人とそゝめんしなきに
となりのかゝるにもひぬ下　人家
遥々に出るのくさなるにひとり草
人めなりけてこそのなりいまや　西行
かよひ給はる人の家のまへにやをきれ
思ひやりて
法撰集に

いとゝ家のたいりよ立てるまゝ御よ
いとしや　呼ちんうらひまゝの声　新恒

小くさこゝのいい者てつんよ　菅家の作分

いのちにいきれ来るにいきてなれ
仏つくしの人のもてこみ事

打曽　さりともとさせれるまゝつゝ笠
ほ○をかりてりまゝつゝ　紅家

颶母（ホヅル）　山の鍋にほそりせぬ家にいの御よ
あれいひよりしあれ　新六佐

○ほそりといふ人の御也
風ふんとて何海面のひかるを（ヒカル）いふ　家作立内大臣

同ふるにほらさのまゝ　続古今　西院留后文

ほとゝ見てこゝへきあをかりしよ
そふるにほらさを思ひかける

吹風も同ふるにほらさのまゝ　入道前右大臣
なくさめかぬる何のやまりと

（古今にあり）泥中蓮　蓮葉のみとりよしまぬこそかりて
何かいふ所とゝ思しあさむく　俊正　遍照

虎の尾を踏かとし
この海にさげいく太刀の走りさやの
そらの尾ふまてかうろしのよや　月清集に同り

鳥なれ[illegible]の蝙蝠（カハムリ モリナリ）

人をなく鳥のなからんしぬ事ては
このかいをりもつ[illegible]

和泉式部

牽鐘（トシギリ トシギレ）

[illegible]
今[illegible]い何かい花の[illegible]
[illegible]
いそかくとしきりもせぬ[illegible]
[illegible]

貶 太政大臣

動（トバロ）

天の[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夏の[illegible]
[illegible]

夫木集

[illegible]

五月一風十月一雨

吹風をまくの枝を[illegible]
[illegible]

崇徳院

邊（カタイナカ）

夏[illegible]
[illegible]

仲正

糅（カテ）

悴（ヒニホ）[illegible]
[illegible]

[illegible]

長[illegible]寸[illegible]

熟（ニモドク）

萬葉の訓なりおのまゝ熟しるゆへに
人のよを直下（ヨクス）こゝろ
あやまくにはかゝらばそ酒のまぞ
人をことどくいへぐるかも似れ
よりにしてこそしものといつれと
神のたゞくとこそ聞きゞ　那雅

饒（ゼウ）

俗にものゝ多はれるとぜうといふ故事也
説文いふ飽なり　まこ多ィこ穰の字可用
やまとにある字治の那の方なるて山
ぜしにあらゝるかきこゝろいふ那　家の集

麻にてくるゝ蓬（ヨモギ）

家の集
しかりとて西き仏も世にあるへん
ましるよりれの海をしのよや　家語
末本集
西しとて麻のよりれいるまれまて
みるまれてもあれ野のかるかや　俊成
新初撰
世の中の麻にあしなくなり行
仏のまゝのよりれのこゝしまう　平美時

一つ　ふさこさる所
縦横と云あり　右極左極の仏八雲門
拘にとまるとかくまるこそのあなり
とあり

求食（アザル）
鵜飼なとか海士のかたちのものをとるといへるよりいひそめし
ほかにも草の中にも鳩もあさるとよめり山とあされし
なりけりとあり 山にても海にても今はあさりき
このみ求るといふにかぎらんわざなりとふ鳥なり
稀の例にはことにいへるにもあさることもあさる 例也

漁猟（シ）

夫木集
春は雁のさかりにもなりにけり
ゆくらむかたは山の高より 定家
なくして乃落潮にかりるのみ
漁はも日新月とも（？）かは
春はもいかに与めけりさ

巌岩（カクガク）
萬葉集にいへる巌岩（ノチ コチ）かいやせ
いはほこの錦ぞよ風のなくさん
錦らむはいもとも見ゆへし 書付侍らむ

なるかみ 俗に雷の同じ鳴るといふなり
拾玉集
さすがにいそぐ識にはなくとはで
うらてなみやむらむとらむの
人にもなし 慈鎮

皆悉（サナガラ）
萬葉のよみかなり さながらいはよしかのる
なりけりと聞いて我ことをし 定家

花はこゝろしく思ひすてゝよ
さけれ共紙花もさなから

閑の嶽乃郷は當麻乃寺の郷なり
里人もなくて歌ぬるとし山乃
もみちいよるのにしき成けり　貫之

約束（ヤクソク）といふ詞なくて立子くゝらかゝむる意なり
夫木集に
やくそくもなかりしを相逢と
きたしもにもゆるをゆかしは　俊頼

痩髏（ヤセサラボウ）。荘子に出たり
夫木集に
山陰子も何ならぬをみなさくら
ともにたちかれて川人をもなし　俊頼

痩通（ヤセトシル）
大字まりといなりけるに然れは
やせとよりぬるかふろあり
一八敢毛るのカケ。いとめし　郭璞　古今に

罷帰（マカリカエル）。
まかりかへるといふ字しの御前とい詞なり
史記に罷字いとく帰といふ字あり今は常に
いふ詞となまより昔より謡りてこゝろへたは
今又政わるし萬を退出の文字を用ひ
これはやまりなるへし

百字
百花の乃ちは人のまかり出る
ゆうふこよいの月のきぬほか

速（ニヅキ）　分林見枝は来ないとくいとゝやきこえたり

古今　家神ふまゝ紀しくれのふりぬるは

無鉢（コヨナフ）は閑雅（カニカ）とも書くなりかきりなきん

猿猴の月　土御門院

月新ふいのちとりふ新猿よりも

夫木集に　三川こえてぬる家身なりけり

笑（エミ）乃中乃劔　家笠門大臣

何るすも思ひけりとも志てしなよ

笑ミの中かたなやはなまへ

千年とれは人をさしてふいがくりの

ゑゑのたらなるかたなかろうし　公朝

六月（ムイカ）の菖蒲さるの。あやめは六月の日に用ゆるなきは

六日にふきりていふ月さるなり

いつまやん今は六日のあやめ　家笠門大臣

ひく人をもなきに家身なりけり

馬に道ゆまりきれ

夕されは道もつくしけれしふる里は

牛車しこゝにまりせてうゆく

乃ら　萬葉に原乃字を乃らと訓せり。然らは郢

原乃ことをいふなり。俗に不景もなくあるじ

歩りしのとゝ乃らも此といふなり。誠に郢家に

草のくさ浮子勝(ごやう)しもいふも同じ事なり 文

乃ちおのこは鶏なるべし

星は西王母がいふしやくなりや　徳元

庵もやうやうも何をみるらくなる　遍照

くらげも骨にあふ

夫木集二

まなこは海の月とぞ見えける

くらげの骨にあふよなりけりや

みつわさし八十あまりの年の波

くらげのほねにあふよしもがな　仲正

堪賀上人

愚人夏の虫飛て火に入る

夏虫を何かいひけん心から

我も思ひにもえぬべらなり　躬恒

頼む木の下に雨漏る

主上笠置を御没落の時 楠を御ふ松の几と
雨のふりけるにのりめさせ給ふ木蔭に立よらせ給ひ
しれハ下雨露のをちかかりけれバ 御神かくさせ給ふ
御製しける

さして行笠置の山を出しより
あめが下にはかくれがもなし

藤房卿つなきとて御答へ申す

いかにせん頼む木蔭に立よれば
なほ袖ぬらす松の下つゆ

うやつい其奴（ツノヤツコ）といふ轉語なり

騒（ツメリ）

家林の枝にいそく騒のなきとゝ万葉にうめきとゝ也なり
いこさきうしき意なり

まひら男いとも妹めの姫なくもの
んとあらん家なりしき

萬葉集

名家さてるい木の丸

清浦奥後集にいはく

天智天白王在ニ清ニ
かゝるのありて蘇我の山といふところに
黒木の屋ゐ清くりておりしまゝとゝ木の丸屋
とゝ在るし丸木にこの清くれる屋のるゝ知り
こゝに用心としのひけるいへ入れる人回ぬふ
名家にしたし分り

朝（ヨサ）ゆふ木の丸屋にはれおまはは
名家とし清しひくいふかるなり

天智天白王

ナメゲ
無礼

清水納言の枕草紙にいはく。安ミ詞のなめきと
何りうもなめぎといふ家の神無礼にかゝりしき意也
今俗になめるゝなどいふも無礼るゝなる
なるなり。家林の枝葉になるなりしいへなるなり

萬葉

いつゆ門なる松浦の川の河なるしかる
なるなるかもとゝ家意めや　さ

古今

みよしの大川の色のふち波の
なるなるをうゝ家意めや　さ

いふよりもいとてなりふかまさるとて
とてぬもとふるおとりやうせし
痛ふ事の見腹とさぐらまなる
君子防ニ未然ニ不處ニ嫌疑間ニ
後拾遺ニ
山里ハ紅葉ふ地ふとや思ふらん
ちりいそ話ふべかりけれ
公任ニ
いろがバまえ事
家の集ニ
ふるのゝ山の無橋のまたり
ちりくともいろかハまえれ
郡内のもはし

石投子女（イシナゴ）の童のまたあるひどなり
赤染衛門ニ女院の姫ゑと申へさせし
いしなぶとりの石めまとを集てまとりあり。
おほんいしなとりの石をつてまやのまゝ。
三十一ありつれバとあり
家の集ニ
石なごのおのかちふ紅袴なきよ
るゝ月日ハかたりやまとまし
西ひとん

甲(カウ)乙(ラツ)丙(ヘイ)丁(テイ)戊(ボウ)己(キ)庚(カウ)辛(シ)壬(ミツ)癸(キ)

子(シ)丑(テウ)寅(イン)卯(バウ)辰(シン)巳(シ)午(ゴ)未(ビ)

申(シン)酉(ユウ)戌(ジユツ)亥(ガイ)

五節 七種 上巳 端午 七夕 重陽

七節 元三 上巳 端午 七夕 重陽

田面(八月)(初ノ稻白) 玄猪(十月初ノ猪白)

日之異名

月蘇(ツ) 朔日 既朔(キサク) 二日 旁死魄 三日

戴生明(タイセイメイ) 三日 上弦 八日 上旬 十日 上陽 十日

幾望 十四日 望 十五日 既望 十六日 戴生魂 十七日

中旬 十九日 念二 廿二日 下弦 廿三日

不聞鶯尋テ郭公可聞。尋分テ野山ヲ
可花惜不黄葉惜可待初雪
時雨霰不待

市巷（シコウ）　西街（ニシマチ）　南巷（ミナミマチ）　縉紳家（ガタ）　否極（ヒキヨリ）

巻来（タイライ）　豪家（ガウカ）　因循（インジユン）　政事　主顧（トクイ）

貸朴（シツボク）　貸素　逃（バガレ）　粮糧（シロタヘ）　蓬仏之難除郊

啊啷（アワロ）　蘭壁（カベトナリ）　虞（ウツムク）

○鉄橋（テツキヨウ）（テツキウノフ）　○檑木（ライギ）（スリコギ）　○柳骨（トユリ）上

片服痛笑記

古今馬鹿集に見る所也而有仏
智恵の無子小豆大菜根らのよしある
事なれば今は本分も能く棟割の詞
ことなし 月花の定座乃毒断もなく
去煙の吟合をもなし 志れを三十一
の字のとなれば語やらしかり語じ
しすかなしし 柳氏ゐるれ字のみ言は

のみなきなかりしまた

鈴しきる野はの水の底とは

わがるもしげむ年雲蓬が

此ゆきこそ乃御新とおしやきかしこみ

かりまもかほしこもしくつきそるまつ

無厚山人

本賃法師

田子の浦に富士の高根の水新は

雲のうへもまも蛙なくなると

先生は高ぼけ根緑の唱へは四方也

而るに性は吉田の西は西の節のぬしへ

字通りよある

むとれ山人

誦もれは四方の志れの言葉は

何にもれもかよはさりけれ

乃ぎりは
よ事の如き
新意をもとめて大工のもとにかゝる
いしのぎりは思ひきるまで
寄 蠟燭意
蠟燭の流の末は無情の
池となりて思ひとなりけん

寄 傘意
西の中をもぬけし蝉の傘外
ひしこの頁途の思ひ契続
寄 煙草意
思ひならはしの合と五分切
別 煙草の意をやはせん

寄風意　　金屋山人

かくばかり通ひ別る関ぬるの
志らしとしられる明れ花

○鮎后之五音ハ
雪ヲ　ヨキ
夏ヲ　ヨソ
カヨイ　カユイ　ヒカユイ　之カナ面也

日

家意ハ人も志らしとしらしに
清しかしける袖のしいだく

笑之九典

日

吟ハ込んぶ意得と人にしらして
東志らしといひちとも那

毎逸

臣くいんよ
よ事る意　　云屋山人

敬天寛臣くんの花ふ光まどり
よし芝久保の茶ふい意中

こんにやくよ
よ事る意

こんにやくの糊のさめい紙をもの
どしこまれても離るべきかい

寄屁（へこ）意

こゝれぬ見かならのうつりまを
色のむの絵のあらんがりは

寄幕意

かなくいざる意ふ浮ふ名の立甲山
幕て掃んりほの紅葉ぐ

寛政二いぬのとしのくれに
小出し母にみたりとらくめ
そこにかゝる谷そこに湖ぬる乃
ともしへやんほとして四角の
下ケ行燈ふかくふかめれ

玄鷹

灯燃をしてこゝろ請ば珍章と
ひとゝ取明くしはしき四角は長

かゝて絢やしらまたりもそもは
笑しの為恋のぬしのりしく
うんとん非ねてしまる

まきる

優曇花のえなまち新ふとん
ゆつきなきけとつ為めくしませ

寛政二いぬのとし

玄鷹山人
平賀居師

鄙眷

牧野駿河守ゟ月畫月殺ニ
摺木拵子をとかきて
○まがりてもの拵子ハものをすゝふえ
直てものをつゐさす小米
申し申さし　天子御殿ゟ拵間
九條ゟ所兵まで伏見へとけれ
ゟ拵しよし　所司とて

○こちまさふ鹿のゆまおりふるよく
きゝ所守ゟ恙すりれハ
又所詠ゆまく
○民ゆまなさけをゝ我と曰のもとの
代こをきまの周の司サハ
松平戴中守ゟ東海乃御道の
御宮の座ハ拵拵ゟ鶏を畫
又ゆまりもなふ

われハ所謂[illegible]
[illegible]人日[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]人の[illegible]

○[illegible]
人の[illegible]

壺ノ石碑說 再考

俗說十品村地奥州宮城郡部大石ニ弾ツテ
日本中央ノ印ストコレヲ壺石碑ト云傳此事諸
書載如甚誤レ爰考
今存壺碑奥州宮城郡建石長六尺
幅三尺也 吾銘曰
多賀城去京一千五百里去蝦蟆岡一千百

白井里去常陸国坂四白十二里去下野国
坂二白七千四里去蘇羯国三千里此
神武元年東次甲子　府寮使兼鎮
守将軍従四位上勲四等大野東人
朝臣之所建也天平宝字六年東次
壬寅参議東海東山之節度使従
四位上部首郷兼府寮使鎮守将軍

藤原恵美朝臣掲修造也
天平宝治六年十一月三日　トアリ
和古ヒ古大将和名のかすよ
ミちにくのいとてしのふにえらしゆ
のれ君ーしてよ土亜のいしゆを
コレツモテ居説ノ如ニ迄ツ云ヘシ

午後春二月五日行會初
僊洞聖廟行法示
詩家當座　御會
奈好　中虎　中納言
題名　冷泉中納言
奉行　長尋　井大納言
早春雪　藏人

色まさふ雪に同じ雪　神示きの
[illegible]
散雪　家仁
さく雪の色香にめかぬ言ふ呂よりも
ち上のそとにもちまきちやくん春
折雪　内前
[illegible]

めかてとくまれしらのうめのそん
梅一類毒　兼繁
この二風もてきふ人のかさしたる
うれとくしたるふ所への　梅の梅
又柔毒　宗家
和尚を三風もの和し　梅植し
ワのきのまゝをとゞめ

梅柔同　宗称
こゝ風さ夏風にいまゝ候めへ
のきえの香はむとまゝ
梅和同　為泰
よそこすりまゝ神垣のそらまゝ
をさき神くまゝにふ梅の香
梅を毒　桂香

子壽　　堯恭

宮梅向子聲悠清　帶得老凡
香暗生　終日對花想何遜
年遲一樹　改分明

曉壽　　長視

鳳戒春色曉氣氳　疎影清香
梅末分何見高天星斗少　罷疑樹上

荒鄉之
已上未畧

以下
2丁
白紙

俳諧獨吟集

無二翁山人 稿

春日之部

鶯の仙しまゝ不知音部

鶯や朝茶乃ひいきの辭

天滿宮　法樂

栢手外ひこいとゝいかりけれ紀

州書きの其雪をやはらしし

云冑成後後ゝめのも柄那
姑めみ茶も撰ゝれぬ妹葉に
吹かぬ日いとも七ゝ柳に
木槿吟ゝ鳥さへ鴻ぬ菫那
洵ぬのこゝへてりぬるむ水の夕
九重乃那や花の八重霞
雲の夢を紙るやきしの夕

雉子

ほんくと池の花礫の蛙那
濂印の紙のこゝろや朧月
行れずを絹の花のさくら那
手金の勅定ぎるや菅の春
蝶なく声をまくらや十三里
西鶴中の利屈離れて柳に
ゆらて[まと]ぶなり沒める水の[山ぶつ]瘡[くらくも]

嘆や此桃子うり絶の妹ノ郎
燕や言ひ出はこ羽今日ハ云羽
今朝ハかりとなる風ゝき雑煮ハ
門松の中のみしめや二見浦

玄丘

仝

夏之部

谷入まぬ之枯しや閑呼鳥
牛のまや風も仙倍も見硯
六月雨やまたらぬ星をし
月としとむ仏の闇の粉糸ゞ
黒ぬのうとくふるやとも牛
蔵醫らもそしら廣し云文

嚔して侍者も居るや
蟬の音やかさぬ前の蓑表
水と火の仲むつまし以筆那
鶏の明るもまきの鶏
[illegible]鶏の[illegible]
塙川石そ新古今にあり
[illegible]
[illegible]

秋之部

笑休のうよぐ姫にて鶴の秋
星会の鶴まふ扇し別れ
鶴ゟほハタ鶴しの蒼那
鶴ゟほ白もふ見る日の降も花
晴蛉白村雨しれの入日鶴
山彦の徳ゟ音白にうつむ石

冬之部

○豊苻に曇河しき日和ノ那
○炭ゑ○日音淋しさや冬籠
風に浮くもの其の鉢ゑ集に
立枯の梢に草やく鉢の雪
積雪を事共せしに柳ノ那
宮ゝ菊や目貫ゑやゝに一二輪

櫻麻の物思ふ夜さのきぬしめ。
春雨しなの春を隣の雲一重
埋火の明ていき[illegible]いそ[illegible]。徐安吟
鳶帽子[illegible]ぬ文奴かほし里神樂

小出島之雅 廿延

雪いぶく松は黒土画の気象に　荷香

河音ときき月の夕の晴　素風

縫いと縫人とまれいへの事て　今鳥

、

云乃若子の積まる如雪に柳川　今鳥

冬ともめりしかれ桂ふ此里　徐坊

霰降る霄面白し　板庇　鶴庵

茶の中に出しけも　口切　如雪

番船

哦

嘲乃網子ともに雪夜　桃有子

頭巾かけつゝ名み上國雨　如雪

臥陽窟大人小千谷にて專照精舎
に時まつることありこゝろさしいと專之に
年頃ありしなから所は桃花の中なる
ふかくすきれは國ニ子も
禮にいらるゝあそこらのしかれて
春の日のなから
よろしく

のなりしこし

無唐山人

服部とよるや師走のみしめ縄

寛政三 辛亥 歳旦 無暦山人

年〻歳〻花相似

ひしひはる初日の花の山ひらら

歳暮

歳〻年〻人不同

子ハ親と成つて親とけしひ坂

春臭

静さよ益はゝ霞ふ所ハ朧

大温泉霊峯　奉納

醫王瑠璃光佛殿　無暦　拜書

奉

あなの貴ふと鶯も葉の湯の白

夏

鶯ぬ小手拭の朝ぼらを

秀

打石の形あらまほ碌哉

冬

夢さめるしほしきや温泉の行方

序

物言いとも處子よりてかたり。雖然乃鼈（ガウ）を伊勢の濱鯉雲（コト）泥萬里。下諸と淺味噌の大あるはけれいと長くなる。柳樹のうれまぜくり毛。嘘八百を恒屋馬。そこでおほうが鯉の昌駿河の國なまり。道中双あとも木賃法師

[illegible]

京島原乃太夫詞

ぬしさんいおけしをよしかも春秋御名
御しゆらくなるまでも茶しもてこい

京安川丁縄手の頃まちに
女郎のうをおやはしいふ申す
わんぢめ申りぢめ芸ぢめ
祇園町にしくぶんあり宮へ

やり手京にいやりまれるが
なるねといふ

安川丁なるねが詞

おおほいばんまれるよおなつし
おほめたんのふしふもおおふ

大坂新町太鼓が詞

つんなさエよいきたなる手拭そしてあて
うらの床花おあしまさしじ

駿河乃国

二丁町 如鄭乃宿

いかし色駿河の府中ハ七丁町あり。
又丁ハ河戸の新よしまへ一ハ有て。
あり二丁町いまふあり。此里の宿ハ

左右ハ所ざんまとさしでおざんまた。
かしでおざんまた。所あなたれましを。
よふ所ざんましゝといふ

よふおざんまし為といふて手を清いて
つよんこそかでおざんまたなり

甲府柳町 如鄭屋乃
如鄭乃宿

甲斐の国の詞い。呂にしと呼ぶよ。おの字を
清ぬて。お呂にしといふ。何方へかくといふを。
おどつちへおいきやるといふ。おるといふるよ。
おあるといい。物のおあし多事とば。
おてといふ。女郎のるを。お奠女といふ。
れ持ッるよ。お れ持ちお中をといふ
おさむいよおほんにおよふおできやつ多

おむりいのお奠女おとりもとう
伊豆の国外浦濱下田
愛版女郎乃詞
但し愛版ハ鮎後のひきやくし
どしばらへぶん乃ぼりめせお客どの
たつくと腰にそやくどくし
づきや

板子ぶしの
板子如節 ひさりの玉

寅乃来るすを。来さつさりました。
御るすを。御らさつさりました。御と
吾めといふるすを。吾まさつさりませ。
服を唅んといふすを。唅さつさりませ
といふなり

来さつさりました。かまやくる

天口さつさりませ酒を能かん
見申帰らさつさりまたならば
おめしをゐんと唅つさりませ

下総桃子
松岸 本所 和田

三ケ石如節之詞

此桃子と板子ふそいは紋日のうすを相日。
きうんひんの家を。忍いきつ(ツメル)あいと
お目をも仕思ふてくれぞ兼理もせだ
忍いきつ(ツメル)あれのきうんひん家
仙臺隠竈之お女之詞
赤ちらをめつらふひつきやる
お家ゑ

おらくい嘘ぶんぬきいせぬ

奥列 本文 那山之詞

抱代本文那山と詞は此春已ふ秘笈は。能く越よ
仙を附ケて見る後ろし。ぜんせいのうを本文
那山八下ノ目ニ云ハ。立テおとゝ申は。そんぞ乃ゑ
お御ゑ事ていは。お勵とも。おいらんとも申ぬは。
女郎は買ふるを。何ゑ此ゑ仕ゑ事ハ

心之郡山高い。かけてとゝかれば。是に皇に
お限りは詞と云ふ。諺推言之は云ふ。お別島
は。茂秘なのとお郡にしかれば。又本文郡山
理程十三里半。西南の方に有る國
河内。則禾安金椀安國是なり。此不
乃云傳に。諏にいふるを。まつこと。茶を一ツ
ありとゝ申すを。くんざいくと鼻色に掛て

通用致す。右椀安国に高人。本文郡山に本
朝之時　分ニ
亀てこの郡四五人見せてくんざい
急らしどうかしてこれでかけべい

本文郡山　如郎之詞

本文郡山にて業深せぬ如郎と。お桂なのお桂なの
お桂なのと呼び。業深神とめまれば。通用に

新後蘭泉之
うきよ女郎

京都にてい能ふ口ゆきく人を池ら弁といひ。
蘭泉にてい。志や酒つちよといふ。又玉つのるす
と。ちやんこともいひ。酒つちよともいふ。玉つを
志らまゝ事と。カヽレタといふ。頭痛えるを
てきなんといふ

志や酒つちよの代客に一二三ツ四ツ
酒つちよりてを頼いてきなん

酒三十ゑ分池千ゑ分といふを。蘭泉にてい
三十ぷりゑ十ゑ文ぷりといふ。口ゑ酒といふを。
あにやアさ酒といふ。ヤレくといふるをエレといふ

あにやアさ酒三十ぷりの酒とりに
エレく酔ふてこヨリヤ 伴えくなん

新潟中道之
女郎之付

かなしげに吞ちやんまつしぶるなり
それでもしんせ悪い酒ぐせ

中道女郎屋
女房が付

宮府とまちしやんしやほどんせん
あれり新んでやつてみしやんせ

此巻を評に曰 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

出雲濱

女郎うた

吾は上ケまちよりも　吾（ハレ）はもやまさも
なほどかなけれ　唸（リウ）はもやませぬが

長唄　石打橋

女郎は買ふものぞ。もとろふとうふは。新屋底
ぞ便所ぞ。又世間おやじ横丁石問など
ハ云ふことをもすくなし。八重とべべ新ぞうしいなる
ヤイ〳〵其門掛に掛らふ　いへいへヤイ〳〵　此ぞ
そこふ所ぞらとらへいへヤイ〳〵　門通らぬと
いへいへヤイ〳〵　無理無すれヤイ〳〵　けりこそふは
此世界は限る　宗のよ

積つて白米二石六斗ふかまふ。これいふ也
全く茶版の噂ふあるべしらば。おこませらば
俳諧二十年の功と積すべしおしい風流の
滑稽。常ゆはどもも明らかならん。神の
いましめなるべし。尤白米二石六斗也。茶
版にて人も振也。家も又振也いまこそ。
服友ふ親疎の隔なく。交りの深淺なく。

一圓平等の境界ふ於ふ俳諧ふ於ふ。
其二魚平等ふ辭一なる俳諧。俳諧有
れんで。俳諧ならば。の井（セイ）沖。連市いつし。
育牲

風流

風ハ一天ふ隔なく。故ふ空席の幕と
なる。流ハ一滴の隔なし。故ふ深き
なまぬなし。そより風流の二字なすせり。

代辭へなきぶ。風流に拘んで風流を
しらざる。井中連布をいふなりけり。
乃ちば代井中の源をもづぬ事に。
井戸ハ隔あるゆへ流ることなし。
流ることなければ外の流を拘ぶる
かたし。流るゝに拘ばれば大海を知ぬ。
大海を知らざるゆへ井中連布といふ也。

代井中の病ひといふ。永井中と蓋は事
家道ぞうれば家道と云ふ。行脚の家
家に尋ぬるといへ。曾に投ぬ事も
絶るさば又向きもせざ。終に風流の辭
なければ。海道茶漬の令精本に志らざ。
まこと外へ井中連布とも六のり所断ず。
かなじ其事に生れ合ふといへ。一様に
ぞしの井中の六のりいとへ苦しき云ふ也。

隔ましい事也。殆かりしきなやまし風流い
隔なきを風流の軌則ともいふべきなや。
しかるに井中連中は隔なき専らとしたるも
此隔といふは意地といふ一物より多なる。
皆ひとし屈事的の屈ひとやいふん

雪こも吟 水に屈れば無一物

無鳥山人

寝乃道理を解へなきなる屈屈多なる。
屈屈とは行勢流は行勢流で一トかたより。
無流流は無流流で一トかたより。雪ハ意
地を張ち乃矢ちけ心の無風流。多ぐひに
朋友の中と無風流なるにしけもちゆ。
それが中に無流同士にて碍を張り合。
或は宗道を多ぐひに撰らしを喰ふて。聞くの
内井ヲの中に屈を古へ云ふ。一圓平等の

奥如の□□と拜み（手）□□□度逢ふ（よ）□□
かし。□□き□や。三石六斗の□耗損
も水の□□□て。一斗の□□□斗
□□の服を□（す）。□□□□六斗（リ）の
氣を□□□□□。築□□盤桃▲二尊とは
右佛語（イツリ）□□□□□（ホンカイチ）しや。
ぼんふ蓮つ□佛語地（よ）□□□□□□の

（諸ましいこと）
▼流川の探錄角力佛語と□て□□□□□
尋□□□□□□□□カノ井中津軍の□□□
□□□□□。細文の十億□□□□□□憂の
奥□□□。右□□□□□羽團の□□□句料
の□化の（ブツカケ）□□□□。捨文津軍の□□や
□□や□。勝つて兜の緒とシテ▼二句十（究）二十（究）の
事ずまずり□□佛語。□□□□□□
何□几□□□。
庵□□□□□□有□□□。出□□
。□□□□□□□□佛閣の奉納□□□□
。□□□□

秋吟ハ任入ツ。又ハ氏神鎮守当地等
さるハ奉納ニ甲斐なくしハ。
奉らぬ人ハ……

奉納 天照文 豊穣……
此辺の人 往し……
一天ニ天の……やはらく……

東都 蓼太

奉納 清泉……世音
突かんばかりの……

奉納 成田山不動尊
涼しさや滝ニ梵字の……

仝 柳居

奉納 河ノ鈴ヶ森八幡宮
鈴ヶ森の……

仝 秋瓜

此奉納……
……

庵の三相伴にて雪を絵めまゐらせ
言ふとりこゝ手ふりめいまゐらせ
何らそのつれおしのおまれや

湯のめいひとり二年ら主人
ゆるの雪

以下
42丁
白紙

足

一丈ニ人守カト

但シ　フキ其ニ

一袖ニ人守カト

一紐ニ守カト

一目ニ人守カト

後守カト

前守カト

一乃ニ人守カト

足

一俳諧二見ノ

安ニ　擇鉄呂

糸寺町二条下ル所

橋屋治兵衛板

一刀

糸

ニ安定作

一丈ニ人守